



樹間から望む富士山

感井坊からしばらくはほぼ平坦で、途中で富士山を見ることができる眺望臺かな道である。いままでの坂道で乱れた呼吸を整えながら十萬部寺に向かう。感井坊から一十分ほどで着いた十萬部寺は、建物も新しく人の気配のする寺である。なんとも言えない安心感のなかで一休みすることにした。



赤沢宿の旅籠

十萬里^{じゅうまんり}、かのよなだらかだ。下り坂^{くだりざか}で、一時間ほどで赤沢の宿に入つて行くことになるが、途中、前方に突然七面山^{しちめんさん}が見え^{えて}くる場所に出くわす。そこは遙拝所^{ゆうはいしょ}といわれる場所であり、その昔、徳川家康の側室、お万の方によつて七面山の女人禁制^{じんせい}が解かれるまでは、女性たちはこの場所で七面山を拝み、引き返していったと言われているといふのである。

さりに歩を進めていくと、木々の合間から赤沢宿の屋根の連なりが見え隠れするようになり、十分ほどで赤沢宿に到達する。

ここまで歩いてきた車道と分かれ、路肩に若山牧水の歌碑が置かれている石畳の坂道を赤沢宿へと入つてい

通りの両側に建つ木造の旅籠はいずれも、多くの参詣客を受け入れられるように大きな構えとなっており、往時のにぎわいを感じさせている。明治初期には九軒あつたといわれる赤沢宿の旅籠も今では一軒を除いて廃業してしまつたが、どの建物も在りし日の面影を色濃く残している。石

身延山周辺地図



く。宿の中心に向けて下つて行くこの道は、良く整備されていて歩きやすく、両側にある昔の旅籠の家並みとよく調和している。歩けば十分程で通り抜けてしまつ山間の小さな宿場町赤沢は、江戸の中頃から昭和の初期までは身延山から七面山へ向かう信者の宿としてにぎわつたところである。昭和に入ってから早川沿いのバス路線の開通により、この宿を通りず七面山へ参拝が出来るようになり、行き交う人々も少なくなつた。いつしか時流いかに置き去りにされ、

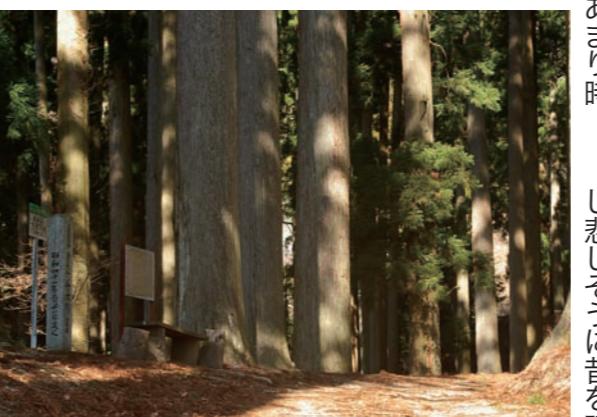
畠に腰を下ろし遠い昔の信者達の喧騒を思い描けば、今にも白い障子の格子を開けて白装束に身を包んだ信者達の集団が家々から出てきそうである。出会った老人が七面山を杖で指示、「あれが七面山で、昔はこの先の白糸の滝で身を清め、山へ登つて行つたものだ。」と教えてくれた。

七面山への表参道入口は、この宿から白糸の滝と羽衣橋を経て三十分程のところにある。

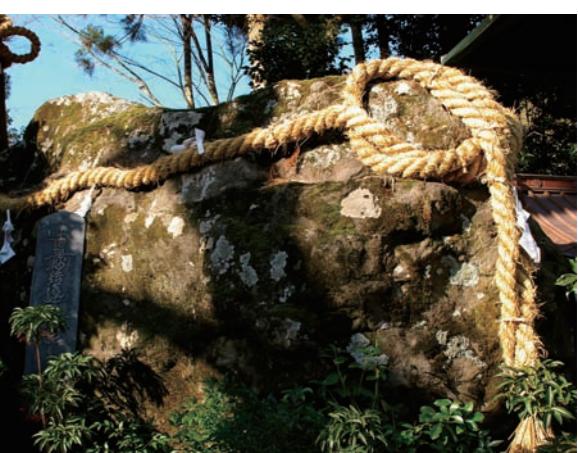


身延山から
追分感井坊を経て七
面山へ向かう参道、その
参道の講中宿としてにぎ
わった赤沢宿は今もな
お静寂の中で息づ
いている。

起点となつた妙石坊は、日蓮聖人が身延山で最初に説法をしたという高座石が残つており、春にはしだれ桜がその景観に色を添える坊である。その境内の裏手から木立の中を歩き始める、参道は車道との合流を繰り返しながら、およそ一十分程度で松樹庵に着く。眼下に久遠寺の境内が良く見え、歩き始めてからあまり時間は経っていないが、一休みしたくなる場所である。松樹庵をあとにして再び歩く参道は「巨木の切り株や南天の木を木漏れ日が照らす静かな道である。追分感井坊への道は途中で左に折れ願満稻荷社を経由して行く道もあつたようだが、今



では森の中に埋もれてしまつてゐる。
やがて参道は車道に合流し、開けた空からの陽が全身を包み込む道となる。松樹庵から二十五分ほど歩いた所に、馬頭観音と思われる碑が置かれていた。大木の影に佇む石碑が、少し悲しそうに昔を語つてゐるようにも見える。しばらく歩くと杉の大木の間へと道は入つていく。この辺りは千本杉と呼ばれているが、樹齢二



妙石坊の高座石